

「情報の扱い方に関する事項」の指導に関する考察
－意見に説得力をもたせたり、吟味させたりする指導を中心に－
Considerations on Teaching "Matters Concerning the Handling of Information"
: Focusing on teaching students to persuade and examine their opinions

井上雅彦 INOUE Masahiko

1. 問題の所在

現行学習指導要領において、育成すべき資質・能力の3つの柱として「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力など」「学びに向かう力、人間性など」が示された。国語科においては、「知識及び技能」の内容が、「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」「(2)情報の扱い方に関する事項」「(3)我が国の言語文化に関する事項」という構成になり、「情報の扱い方に関する事項」が新たに加えられた。この背景には、急速に情報化が進む現代社会では、膨大な情報の中から必要な情報を取捨選択したり、情報と情報の関係を捉えたりして、理解や表現する力が求められていることがある。

「情報の扱い方に関する事項」のなかでも、意見や主張に説得力をもたせたり、吟味させたりするための指導事項は、小学校から高等学校まで配置されている。小学校では第3学年及び第4学年の指導事項に「ア 考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報と情報との関係について理解すること」(傍線は稿者による。以下同様)とあり、考えが理由や事例によって支えられていることを理解させようとしている。また、中学校では第1学年の指導事項に「ア 原因と結果、意見と根拠など情報と情報との関係について理解すること」、第2学年では「イ 意見と根拠、具体と抽象など情報と情報との関係について理解すること」と記されており、意見を支える根拠を明らかにすることや、意見を裏付けるより適切な根拠の在り方を

理解することを求めている。高等学校において「情報の扱い方に関する事項」は、「現代の国語」¹と「論理国語」²で取り扱うことになっている。「現代の国語」では「ア 主張と論拠など情報と情報との関係について理解すること」、「論理国語」では「ア 主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めること」と指導事項が記されている。主張と論拠の関係、主張と反証の関係を理解することを求めているのである。

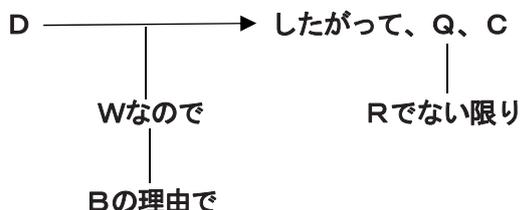
このような「考えと理由や事例」「意見と根拠」「主張と論拠」「主張と反証」などの関係を把握させるためには、三角ロジックやトゥールミン・モデル³を活用することが効果的である。本稿では、「情報の扱い方に関する事項」のなかでも意見や主張に説得力をもたせたり、吟味させたりする指導について、小学校から高等学校までの系統性を明らかにする。その際、三角ロジックやトゥールミン・モデルを援用するとともに、その用語の混乱という問題を指摘し、解決案を示す。

2. トウールミン・モデル

日常の議論ではどのような論拠に基づき、どのように論を構成するかによって、相手が納得したり、納得しなかったりする。アリストテレスの三段論法のような形式論理学ではない、実際に行われている一般的な議論の「論証のレイアウト (layout of argument)」を、スティーヴン・トゥールミン (Stephen Toulmin) は1958年に『議論の技

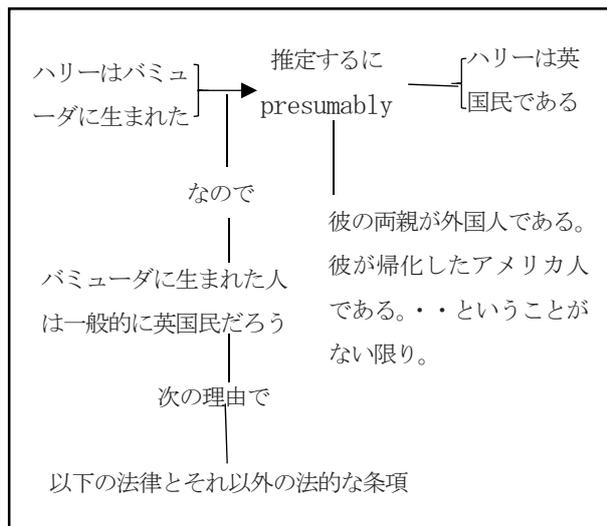
法 (The Uses of Argument)』⁴で示した。これをアメリカ人研究者らがディベート教科書で紹介し、それがのちにトゥールミン・モデルと呼ばれるようになった⁵。

トゥールミンは、ある主張 (Claim) をするときには、主張の根拠となる事実・データ (Data) が必要であり、さらになぜその根拠によってある主張ができるかを説明する理由づけ (Warrant) がなければならないと述べる。しかし、これだけでは不十分で、理由づけが正当なものである裏付け (Backing)、理由づけの確かさの程度 (Qualifiers)、 「～でない限りは」という条件を表す反証 (Rebuttal) がなければならないと考えた。これを図示したものが図表1である。



図表1 ※『議論の技法』日本語訳版 (2011) P.153 より

図表2は、トゥールミン自身が『議論の技法』 (P.154) にあげている論証の組み立て例である。



図表2

ハリーはバミューダに生まれた (D)。だから、ハリーの両親が外国人であったり、アメリカに帰

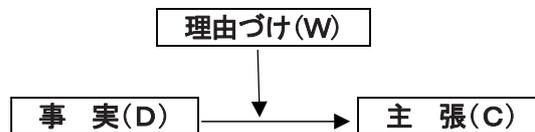
化したりといった事情がない限り (R)、おそらく (Q)、ハリーはイギリス人である (C)。というのは、バミューダ生まれは一般的にイギリス人であるからであり (W)、それは以下のような法律とそれ以外の法的な条項によって定まっているから (B) である。

この場合、「ハリーはバミューダで生まれた」という事実 (データ) から、「ハリーはイギリス人である」という主張がどの程度の確かさで論証できるかを示しており、不完全な推論の場合には、どの要素に弱点があるのかが理解できる。トゥールミンは、図表1の6要素を用いて、論証に共通する形式を取り出し、議論構造のモデルを作ったのである。

3. 三角ロジック

トゥールミン・モデルを日本で最初に紹介したと思われるのは井上尚美(1965)「論証の構造」⁶である。井上はトゥールミン・モデルの「大きな骨組みとしては、『主張』とそれを裏づける『データ』『理由』の三つを中心と考え、他の三つ(限定、反証、理由の裏づけ)は一括して『但し書き』とした方がすっきりする」⁷と述べている。

図表1のトゥールミン・モデルから基本的要素のD・W・Cを取り出し、単純化すると図表3のようになる。トゥールミン・モデルとの連続性の有無については明確にされていない⁸が、この三要素は「三角ロジック」と呼ばれ、ディベートや国語教育の分野で活用されてきた。



図表3

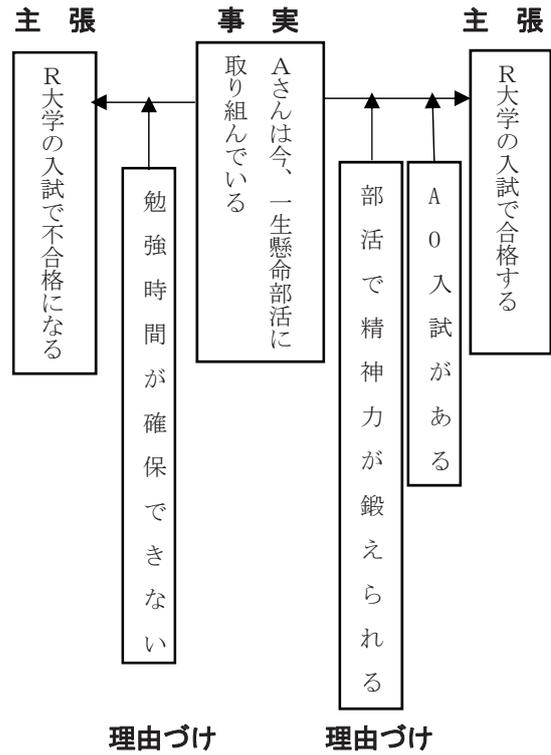
鶴田清司は「小・中学校の段階ではこれで十分だ」という意見もある⁹と述べ、中村敦雄も「主張・事実(データ)・理由づけの三要素だけでも、実際の場面では十分に応用が可能である」と指摘する。さらに「これらの要素の区別は、わが国の国

語科教育に対しても示唆に富んでいる。なぜなら、これまでの国語科教育では、事実と意見の区別は重視されても、その理由づけは見過ごされてきたからである¹⁰と記している。

では、具体的に三角ロジックはどのように有効なのであろうか。図表4の例をもとに考えてみる¹¹。「Aさんは今、一生懸命部活に取り組んでいる」という「事実」があったとしよう。この「事実」から、Bさんが「AさんはR大学の入試で合格する」と「主張」した場合、Bさんは受け手も自分と同じ「理由づけ」によって「主張」を理解してくれると思っている。しかし、Bさんが「部活で入試に必要な精神力が鍛えられるから」という「理由づけ」をしているのに対して、受け手が「AO入試があるから」と「理由づけ」をしていたらどうだろうか。Bさんと受け手は正確なコミュニケーションができていないとは言えない。つまり、「主張」には「事実」だけでなく「理由づけ」が必要なのである。三角ロジックは、「主張」が「事実」と「理由づけ」によって支えられているか、論理的に導かれているかを吟味するのに有効である。

また、「Aさんは今、一生懸命部活に取り組んでいる」という「事実」から、Cさんが「AさんはR大学の入試で不合格になる」と「主張」することもできるであろう。このように同じ事実から全く違う「主張」ができることもある。この場合、CさんとBさんの「理由づけ」を比較しないとどちらの主張が正しいか判断ができない。例えばCさんが「R大学の合格に必要な勉強時間が確保できないから」と「理由づけ」をしたとしよう。そのとき、Bさんの「部活でR大学の入試に必要な精神力が鍛えられるから」という「理由づけ」と比較して初めてどちらの主張に妥当性があるかを定めることができる。

このように三角ロジックは議論構造を理解するための基本モデルであり、論証の基本的なレイアウトモデルとして効果を発揮する。



図表4

4. 「情報の扱い方に関する事項」の指導の実際

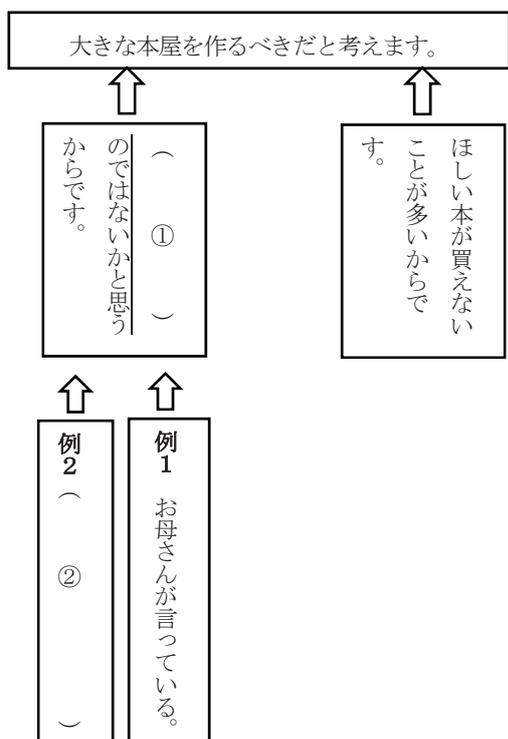
意見や主張に説得力をもたせたり、意見や主張を吟味したりするために、「情報の扱い方に関する事項」はどのような指導が行われているのであろうか。学習指導要領および学習指導要領解説（以下、解説と記す）と教科書¹²をもとに、その実際と系統性を明らかにする。その際、三角ロジック、トゥールミン・モデルを援用しながら検討する。

(1) 小学校の「情報の扱い方に関する事項」

先述のように、小学校第3学年及び第4学年の指導事項に「ア 考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報と情報との関係について理解すること」とある。解説には「考えがどのような理由や事例によって支えられているかを吟味することが重要である」と記されており、考えを支える理由や事例を明確にすることを求めている。

東京書籍4年生の教科書に「言葉で考えを伝える」という教材がある。事実と考えの区別、考

えと理由を伝える言葉（「…と考える」「…と思う」等、「…からである」「その理由は…」等）について学ばせたあと、ある文章における考えとその理由を抜き出して、下図の空所①②に入れさせる内容になっている（傍線は教科書のママ）。



図表5

「大きな本屋を作るべきだ」という考えについて、「ほしい本が買えないことが多いから」という「理由づけ」が明らかにされており、①に入れる「町内に大きな本屋がほしいという人が多いのではないかと思うから」という理由づけを文章より探させる。次に①の理由づけを支える例1「お母さんが言っている」が記されており、例2の②「十二月の『町民の声』にも多くの人が言っている」を探させる。このようにして、意見文の構成を理解させようとしている。この教科書では三角ロジックを意識しつつも「事実」と「理由づけ」を明確に分けることまでは求めている。また、光村図書4年生の教科書では「考えと例」という教材で、「あなたは、どんな遊び

が好きですか。例をいくつかあげて話しましょう」という問いが設けられている。教材では「ぼくは、勝ち負けがはっきりつく遊びが好きです。例えば、サッカーです。勝つとうれしいし、負けても『今度こそ。』と思って、またしたくなります。…」という男子の吹き出しが載せられ、考えとそれを支える事例や理由のむすびつきを確かめさせようとしている。小学校3, 4年生においては、意見と理由、事例との関係に重きが置かれている。

(2) 中学校の「情報の扱い方に関する事項」

中学校では、第1学年の指導事項に「ア 原因と結果、意見と根拠など情報と情報との関係について理解すること」、第2学年では「イ 意見と根拠、具体と抽象など情報と情報との関係について理解すること」と記されている。両学年とも「意見と根拠」との関係と同じ記述である。

解説では、第1学年「他者の意見を理解したり、自分の意見を述べたりする際には、意見を支える根拠¹³を明らかにすることが重要になる」と記されている。東京書籍中学校1年生の教科書教材「根拠を挙げて考えを述べる」は、「独断と水かけ論」「根拠を述べる」「見せかけの根拠」というタイトルで構成されている。考えに対して根拠を示す必要性を述べたうえで、主張に対する根拠を探す問題を設定している。そのあと「修学旅行は学校生活最大のイベントだ。だから寺院巡りがいい」というような例を用いて、「だから」「なぜなら」という語をつないで見ると根拠を挙げているようでも、根拠になっていない場合があると注意を促している。このように東京書籍の教科書では、意見と根拠の関係を概括的に扱っている。光村図書中学校1年生の教科書では、「意見と根拠」という教材で「同じ事実や情報から、違う考えが導かれることもある。だから、意見と根拠をつないでいる考えを明らかにすることが大切だ」というように、三角ロジックという用語は用いていないが、三角ロ

ジックの三要素を明らかにして論証することを求めている。そして、意見と根拠が書かれた文章を示して、意見と根拠をつなぐ考えを推測させる問題が付記されている。三省堂中学校1年生の教科書では、「主張」「事実」「理由づけ」の三つを区別し、意識して考える方法を「三角ロジック」というと説明している。そして、三角ロジックを使うことによって、相手の主張の正しさを確かめたり、自分の主張をより説得力のあるものに高めたりできると記している。

第2学年の指導事項について、解説では「第1学年の学習を踏まえて、意見と根拠との関係を理解するとともに、判断や考えを示す意見を裏付けるためのより適切な根拠の在り方を理解することが求められる」と記されている。「より適切な根拠の在り方を理解する」ために、東京書籍2年生の教科書では「論証の説得力を見極める」という教材を掲載している。この教材は「論証の組み立て」「論証の説得力」というタイトルで構成され、「まず結論と根拠をみつけよう」「根拠は正しいだろうか」「その根拠から本当にその結論が導けるのか」という3つのポイントを示している。意見と根拠とを押さえたうえで、根拠の正しさ、根拠から結論が導き出せるのかを考えさせようとしている。また、光村図書2年生の「根拠の吟味」という教材では、意見の説得力を高めるためには、第1学年で押さえた「客観的な事実、信頼性の高い情報、データを示す」以外に、「意見と根拠のつながりを明確にする」「複数の事実や統計結果などを根拠として示す」というように根拠を吟味するポイントを挙げている。三角ロジックの三要素を区別するだけでなく、そこで用いる情報間の妥当性や信頼性¹⁴を検討させようとしている。

(3) 高等学校の「情報の扱い方に関する事項」

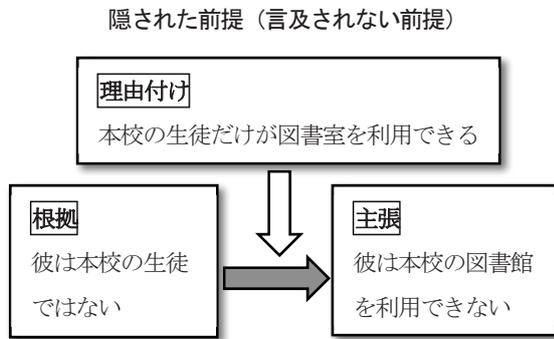
高等学校では、「現代の国語」の指導事項に「ア 主張と論拠など情報と情報との関係について理解すること」が挙げられている。解説では「根拠

のみならず、主張が妥当な理由付けに支えられていることを示すものである」と説明されている。また、「エ 情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方について理解を深め使うこと」という指導事項があり、その解説に「中学校では、情報自体の信頼性を確かめることに重点が置かれていたが、『現代の国語』では、活用する場面にふさわしい情報かどうかを吟味することが求められている」と記されている。つまり、情報の信頼性よりも妥当性に比重をおいて指導することを求めている。

東京書籍「精選 現代の国語」の「文章を読み比べるために」という教材は、「三角ロジックで読み比べる」「『主張』を比較する」「『データ』と『理由づけ』を比較する」「読み比べの観点を持つ」というタイトルで構成されている。同じような主張の三つの評論文について、三角ロジックを用いて比較するという内容になっている。比較する際には「データの信頼性、量、精度、実証可能性など、さまざまな角度から検討しよう。また、〈中略〉理由づけに合理性があるか、異なる理由づけができる可能性がないかなど、幅広い観点で吟味しよう」と記されている。情報の信頼性とともな妥当性を検討することを求めており、文章を比較してその情報の信頼性と妥当性を吟味させる高度な内容となっている。

「論理国語」では「ア 主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めること」という指導事項が記されている。主張と理由、根拠を明らかにすることに加え、反証を視野に入れて論証することを求めている。解説には、「主張とその前提との関係について理解を深めることは、『隠された前提（言及されない前提）』に気づき、検討する力につながる」と記されている。そして、それは「例えば、『彼は本校の生徒ではない。よって彼は本校の図書室を利用できない。』という論理における『隠された前提』＝『本校の生徒だけが図書室を利用できる。』に気

付くような力である」と説明している。この例を三角ロジックに当てはめると図表6のようになる。つまり、三角ロジックに整理して表現されていない要素を明らかにすることを求めている。



図表6

また、解説には「主張に対する反証は、異なる根拠や論拠をあげて、主張とは別の結論を得る筋道である。同じ根拠から異なる論拠によって、全く異なる主張がなされる場合もある。〈中略〉そのほか、例えば、『おそらく』、『でない限り』、『とも言える』など、主張の確からしさを『限定』する記述に注意を払うことも必要である」と記されている。「論理国語」では三角ロジックから発展して、トゥールミン・モデルに基づいて「反証」「限定」を含めた情報と情報の関係を整理することまで求めている。

東京書籍「精選 論理国語」の「論証する力」という教材では、論証が説得力をもつためには、「根拠の適切さ」「導出の適切さ」といった情報の信頼性と妥当性に注意しなければならないと記している。そのうえで反論をされたときには、上記2点に関して、論証の説得力を確かめることが必要であると説き、「反証」を意識して主張を論証する必要性を学ばせようとしている。

(4)「情報の扱いに関する事項」の系統性

これまでの考察から、意見や主張に説得力をもたせたり、吟味したりする力をつけるために、「情報の扱いに関する事項」は、以下のような系統性に基づき指導することが明らかになった。

【小学校中学年】

- ・「考え」とそれを支える「理由」や「事例」を書いたり、話したり、読んだりできる。なお、「理由」と「事例」を区別する必要はない。

【中学校第1学年】

- ・三角ロジックを用いて、「主張」「事実」「理由づけ」の三つを区別して、書いたり、話したり、読んだりできる。

【中学校第2学年】

- ・客観性の高い情報・データであるか（出典をもとに誰が発信した情報か、サンプル数・偏り、データ間での矛盾、調査時期など）を検討することができる¹⁵。
- ・「事実」にもとづいて、「理由づけ」から「主張」が導かれるまでの過程に飛躍や混乱はないかを検討することができる。

【「現代の国語」】

- ・「事実」が妥当で、本質的に重要なものかを考えることができる。
- ・「理由づけ」について、説明していない他の側面がないか。あるいは当てはまらない別の「理由づけ」はないかを考えることができる。

【「論理国語」】

- ・「主張」と主張を裏付ける「事実」「理由」といった中心となる要素だけではなく、トゥールミン・モデルにもとづき「限定」「反証」「裏づけ」といった要素まで理解することができる。

5. 三角ロジックに使用する用語の不統一

意見や主張に説得力をもたせたり、吟味させたりするために、三角ロジック、トゥールミン・モデルは欠かすことのできないツールである。ところが、これらの要素に関わる用語が統一されておらず、三角ロジックやトゥールミン・モデルをより難解なもの¹⁶にしている可能性がある。

図表7のように、井上は三角ロジックの三つの要素を、事実（データ）、意見（主張）、理由

井上	事実（データ）	理由づけ	意見（主張）
鶴田	根拠	理由	主張
国語教科書	事実	理由づけ	主張
三省堂『現代の国語Ⅰ』	根拠		
高等学校学習指導要領	根拠	理由づけ	主張
解説	論拠		
椎名ら、福澤	根拠	論拠	主張
Toulmin(1958/2003)	data	warrant	claim
Toulmin(1979/1984)	grounds	warrant	claim

図表7 ※松下(2021)を改作

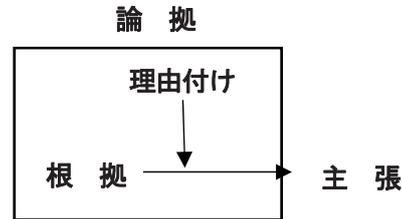
づけと呼んでいる¹⁷。そのうえで「事実」に括弧づけをして「データ」と記しているのは大変重要なことだと述べる。なぜなら、書き手（話し手）が提示している事柄は、書き手の眼を通して観察され認識されたものであり、厳密に考えると客観的な「事実」そのものではない。だから「データ」と呼ぶべきで、その意味ではトゥールミンが「データ」と名づけているのは納得できると述べている。

一方、鶴田は著書のなかで三角ロジックのことを「根拠・理由・主張の3点セット」と呼んでいる¹⁸。井上の示す三角ロジックの要素と鶴田の「根拠・理由・主張の3点セット」の要素との大きな違いは、「事実（データ）」が「根拠」と置き換えられている点である。

先述の三省堂中学校1年生の国語教科書『現代の国語Ⅰ』では、三角ロジックの要素を「事実」-「理由づけ」-「主張」としたうえで、「根拠は、『事実』と『理由づけ』の二つの部分に分けることができます」と説明をしている。つまり、「根拠」は「事実」と「理由づけ」の二つを含意した用語としているのである。

また、高等学校「現代の国語」の「情報の扱い方に関する事項」の解説には、「論拠とは、主張がなぜ成り立つかを説明するための根拠と理由

付けのことであり、根拠のみならず、主張が妥当な理由付けに支えられていることを示すものである¹⁹と説明している。これを図示すると図表8のようになる。



図表8

さらに、椎名らは「トゥールミン・モデルは6つの『構成要素』（根拠、論拠、裏付け、反駁、限定、主張）から成り立っています²⁰と述べ、Warrantを「論拠」と訳している。福澤も「トゥールミンの議論モデルのキーワードは『主張』『根拠』『論拠』でした²¹と述べてWarrantを「論拠」と訳している。

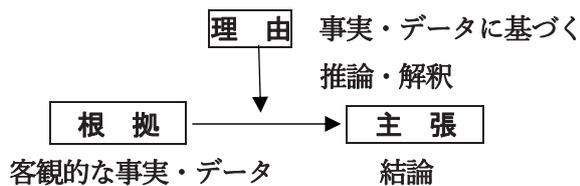
では、トゥールミンは、トゥールミン・モデルの基本要素（三角ロジック）をどのように記しているのだろうか。『議論の技法』（1958）では、「Data-Warrant-Claim」を使用している。しかし、トゥールミンらが後に大学用教科書として書いた『推論入門』（1979）²²では、Dataに代えてGroundという語を用いている。さらに『議論の技法』の改訂版（2003）では再びData-Warrant-Claimを使用しており、トゥールミン自身にもゆれがあることがわかる。

松下佳代は「三角ロジックの“data-warrant-claim”の訳語は必ずしも一致していない²³と述べている。これら英単語の意味を辞書²⁴で調べると、以下のように記されている。

- Data … データ、資料、事実、知識、情報
- Grounds…根拠、理由
- Warrant…正当な理由、根拠
- Claim … 主張

実際にClaim（主張）以外の用語にずれが生じており、Data、Grounds、Warrantの区別が日本語では曖昧である。鶴田は「国語教科書を見ても、『根拠』と『理由』は同じような意味で使われて

いる。しかし、英語ではその違いは明瞭である。『根拠』とは『証拠資料』のことである。そして、それがなぜ主張を支えることになるのか、どうしてその証拠資料からその主張ができるのかを説明するのが『理由づけ』である²⁵と述べている。そのうえで、日本語では同義的に使用されている「根拠」と「理由づけ」を区別するため、三角ロジックを根拠・理由・主張の3点セット（図表9）と呼ぶと記している。



図表9

このように、三角ロジックの要素の訳は、「事実」「データ」「根拠」「理由づけ」に「論拠」という用語まで入り込み、より複雑な様相を呈している。

6. 三角ロジックに使用する用語の整理

鶴田が指摘するように、日本語では「根拠」と「理由」が同義に使われているなら、三角ロジックにおいてそれらを併存させると混乱を招くのではないか。いっそのこと「根拠」という用語は使用せず、井上が記したように「事実（データ）」－「理由づけ」－「主張」とした方が誤解はないのではないか。中村も『日常言語の論理とレトリック』において、トゥールミン・モデルの「要素」に関して The Use of Argument と、An Introduction to Reasoning とでは名称の違いがある。すなわち前者の Data は、後者では Grounds となっている。本書では、わかりやすさを考慮し、『根拠』と訳さず、『事実（データ）』と訳した²⁶と注記し、「根拠」という用語を避けて、前著をもとに Grounds を「事実（データ）」と訳している。同様に、「論拠」という用語も「根拠」と紛らわしいため、三角ロジックにおいては使用を避け、高等学校学習指導要領解説に習って「事

実」と「理由づけ」の両方を指すものとするのが良い。

実際に、「主張」－「事実」－「理由づけ」と「主張」－「根拠」－「理由づけ」とでは理解に差が出るのかを、「国語科指導法」を履修している大学生を対象に調査した。2種類の問題（三角ロジックの要素を「主張」－「事実」－「理由づけ」としたものと「主張」－「根拠」－「理由づけ」としたものを配付して解答をしてもらった。以下がその問題（「主張」－「事実」－「理由づけ」としたものと結果（図表10）である。

<p>(問1) 次の三つを「主張」と「事実」と「理由づけ」に区別しなさい。</p> <p>A) 部活動をすると精神力が鍛えられる</p> <p>B) 太郎は大学受験で成功する</p> <p>C) 太郎は部活動をしている</p> <p>解答: 「主張」は ()、「事実」は ()</p> <p>「理由づけ」は ()</p>
<p>(問2) 次の三つを「主張」と「事実」と「理由づけ」に区別しなさい。</p> <p>A) 欧米では、外来者を客として受け入れる文化だ</p> <p>B) 玄関のドアは、欧米では内側に開く</p> <p>C) 「いらっしやいませ」というように開く</p> <p>解答: 「主張」は ()、「事実」は ()</p> <p>「理由づけ」は ()</p>
<p>(問3) 次の三つを「主張」と「事実」と「理由づけ」に区別しなさい。</p> <p>A) 娯楽的側面を重視しすぎると遊んでいるように見られてしまい、文化祭の存在意義が疑問視される懸念がある。</p> <p>B) アンケートによると、文化祭では娯楽的側面よりも文化的側面を重視すべきだという生徒の意見が多い。</p> <p>C) 今年から文化祭の出し物は、お化け屋敷や迷路ではなく演劇にすべきである。</p> <p>解答: 「主張」は ()、「事実」は ()</p> <p>「理由づけ」は ()</p>

	「事実」	正答率	「根拠」	正答率
問1	48/60人	80%	38/57人	67%
問2	45/60人	75%	41/57人	72%
問3	53/60人	88%	38/57人	67%
合計	146/180人	82%	117/171人	68%

図表 10

母数が少ないためすべての問いに有意差があるとは言えないが、大学生においても「事実」という用語を使用する方が、「根拠」よりも正答率が高かった。小中学生ではなおさらであろう。

学習指導要領解説や教科書において、小学校から高等学校まで「意見」に対して「事実」という用語が使われていることを鶴田は理解しているはずである。しかし、なぜ「事実」ではなく「根拠」という用語を用いて、あえて三角ロジックを「根拠・理由・主張の3点セット」と言い換えたのであろうか。その理由について、松下は「国語教材、とりわけ文学教材の読みにおいて使うのに違和感のない言葉だからではないだろうか。確かに、『事実 データ』と『論拠』にはいかにも科学論文や法廷の議論のような硬い響きがある」²⁷と述べている。鶴田の真意がどこにあったのかはわからないが、確かに文学教材の表現箇所を「事実（データ）」と呼ぶのは違和感があり「根拠」の方がしっくりくる²⁸。しかし、先の議論のように「根拠」は誤解を招くため、文学教材を三角ロジックで解釈させる場合は、「文章表現—理由—意見」（○ページ△行目に～と書いてある。そこから…ので、私は…と考える）」という用語を使用してはどうであろうか。

7. 成果と課題

本稿では、「情報の扱い方に関する事項」のなかでも意見に説得力をもたせたり、吟味させたりするための指導事項に焦点を当てて、次のような指導の系統性を明らかにした。

【小学校中学年】

- ・「考え」とそれを支える「理由」や「事例」を書いたり、話したり、読んだりできる。「理由」と「事例」を区別する必要はない。

【中学校第1学年】

- ・三角ロジックを用いて、「主張」「事実」「理由づけ」の三つを区別して、書いたり、話したり、読んだりできる。

【中学校第2学年】

- ・客観性の高い情報やデータであるか（出典をもとに誰が発信した情報か、サンプル数・偏り、データ間での矛盾、調査時期など）を検討することができる。
- ・「事実」にもとづいて、「理由づけ」から「主張」が導かれるまでの過程に飛躍や混乱はないかを検討することができる。

【「現代の国語」】

- ・「事実」が妥当で、本質的に重要なものかを考えることができる。
- ・「理由づけ」について、説明していない他の側面がないか。あるいは当てはまらない別の「理由づけ」はないかを考えることができる。

【「論理国語」】

- ・「主張」と主張を裏付ける「事実」「理由」といった中心的な要素だけではなく、トゥールミン・モデルにもとづき「限定」「反証」「裏づけ」まで理解することができる。

また、学習指導要領、解説、教科書では、小学校から高等学校まで三角ロジックの三要素を表すのに「考え、意見、主張」「理由、事例、データ、根拠、論拠」などさまざまな用語が使用されていることがわかった。それは研究者においても同様であった。もとを正すと、トゥールミン自身にも揺れがあり、トゥールミン・モデルの日本語訳出にも問題があることが明らかになった。

国語科において、三角ロジック、トゥールミン・モデルは文章表現や会話表現、文章や会話の分析などに用いられるが、具体的には次のような場合が考えられる。

〈文章表現や会話表現〉

- ①意見を書いたり話したりする場合

〈文章や会話の分析〉

- ②筆者の主張がある文章を読んで論証を吟味する場合
- ③主張のある話を聞いて吟味する場合

④文学的文章の解釈に用いる場合

①～③については、意見に説得力をもたせたり、吟味させたりする指導に該当する。この場合、三角ロジックやトゥールミン・モデルの基本要素について「根拠」という用語は使用せず、「事実(データ)ー理由づけー主張(意見)」を用いるのが適切である。また、事実(データ)と理由づけを包括して「論拠」という用語を使用すると整理するのが良いであろう。

④は意見に説得力をもたせたり、吟味させた

りする指導というより、主として「読むこと」領域の指導となるため、①～③の場合とは別に「文章表現ー理由ー意見」を用いるのが適切である。

今後の課題として、「主張」-「事実」-「理由づけ」と「主張」-「根拠」-「理由づけ」との理解差の調査において、対象者数を増やすこと、そして調査対象を大学生だけではなく小学生から高校生まで広げることである。そして発達段階に応じてどのような用語の使用をするのが論証構造の理解を容易にするのかを検討する。

¹ 共通必修科目で第1学年に履修することが多い。

² 選択科目で第2学年以上に履修することが多い。

³ 国語教育の研究者はトゥールミンと表記している場合が多いが、本論では一般的に多くの書籍や論文等で用いられているトゥールミンと表記することにする。

⁴ 2003年に改訂版が出版され、戸田山和久、福澤一由による邦訳が2011年に出版された。

⁵ 牧野由香里(2008)『「議論」のデザイン』ひつじ書房、p. 38、95

⁶ 児童言語研究会、言語論理教育編集委員会編(2008)『今から始める 言語論理教育』p. 247を参照した。

⁷ 井上尚美(2007)『思考力育成への方略～メタ認知・自己学習・言語論理～(増補新版)』明治図書、pp. 84-85

⁸ 松下佳代(2021)『対話型論証による学びのデザイン』勁草書房、p. 14において「D・W・Cを基本要素と考えることにはそれなりの妥当性がある。というわけで、本書では、三角ロジックをトゥールミン・モデル一部として位置づけ議論を進めていくことにしたい」と述べている。稿者も同様の立場をとる。

⁹ 鶴田清司(2017)『授業で使える! 論理的思考力・表現力を育てる三角ロジック』図書文化社、p. 16

¹⁰ 中村教雄(1993)『日常言語の論理とレトリック』教育出版センター、p. 76

¹¹ 濱田秀行(2007)『クリティカルな思考を育む国語科学習指導』漢水社、pp. 27-28の事例を用いた。

¹² 各校種ごとに採択の多い教科書会社のものを参考にした。小学校は東京書籍、光村図書の教科書を、中学校は東京書籍、光村図書、三省堂の教科書を、高等学校は東京書籍の教科書について検討した。

¹³ 中学校学習指導要領解説 p. 46に「根拠とは、考えや行動の拠り所となるもののことを指す」と記されている。

¹⁴ 高等学校学習指導要領解説 p. 80に「情報の妥当性には、その情報が正しいものであるということに加えて、その情報を根拠として挙げる場合などに、根拠としての適切さを欠いていないことが必要となる。その情報がいくら正しいものであっても、何かを主張するための根拠としてふさわしいものとなっていないければ、その主張は説得力をもったものにはならない」「情報の信頼性は、その情報が確かなものであるかどうかを出典の示し方から確認するだけでなく、誰が、いつ、どこで発信したものかを確認することも重要となる。また、様々な情報を収集し吟味した上で、真偽や事実誤認の有無という観点か

ら、確かなものかどうかを吟味することも求められる」と記されている。

¹⁵ トゥールミン・モデルの「裏づけ」に該当する。

¹⁶ 青木(2016)同上 p. 14にトゥールミン・モデルの難点として「初学者が、根拠(G)とワラント(W)を混同してしまわないか」という点が挙げられている。その点について井上尚美(1989)『言語論理教育入門』明治図書、p. 104に「データと理由づけとは、ときによると区別しにくいこともありますが、データのほうは個別的な事実、理由づけのほうはより一般的な仮説という点がちがいます(ふつうの三段論法に当てはめると、データが小前提、理由づけが大前提ということになります)。という指摘がある。これを踏まえて指導する必要がある。」

¹⁷ 児童言語研究会、言語論理教育編集委員会編(2008)同上、pp. 247-248

¹⁸ 鶴田(2017)同上 p. 17、鶴田清司、河野順子編著(2014)『論理的思考力・表現力を育てる言語活動のデザイン 中学校編』明治図書 p. 21など

¹⁹ 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成30年度告示)解説 国語編』p. 78

²⁰ 椎名紀久子、後藤希望、森川セーラ、南塚信吾(2022)『図解で学ぶクリティカル・シンキング トゥールミン・モデルを活かして』アルファベータブックス、p. 42

²¹ 福澤一吉(2018)『新版 議論のレッスン』NHK出版新書、p. 81

²² Stephen Toulmin, Richard Rieke and Allan Janik, "An Introduction to Reasoning" 1979.

²³ 松下佳代(2021)同上、p. 21

²⁴ 竹林滋、東信行他(2003)『新英和中辞典』研究社

²⁵ 鶴田清司、河野順子編著(2014)同上 p. 21

²⁶ 中村(1993)同上 p. 97

²⁷ 松下(2021)同上 p. 22

²⁸ 佐藤佐敏(2013)『思考力を高める授業』三省堂において、佐藤は三角ロジックを用いて文学教材を解釈させている。その際、「根拠ー理由ー解釈」という用語を使用している。他に藤森裕治(2007)『バタフライ・マップ法文学で育てる(美)の論理力』東洋館出版社において、藤森はトゥールミン・モデルを活かしたバタフライ・マップ法という方法で文学教材を解釈させている。その際、藤森は「根拠ー理由ー自分の読み」に反論としての「問題」、その問題の「解決」としている。